

今年の4月18日に開催されたボートレース徳山第6レースの失格判定の誤りは大きなニュースとなった。賠償金の支払いや、対象選手への対応など、手続きが行われているが、再発防止のために審議制度を導入すべきだろう。

今回の案件は妨害失格の対象ではない、全く別の選手を妨害失格と判定し、確定してしまったことで発生した。記者の知り合いも、たまたま同レースの舟券を購入（しかも賠償対象の舟券）しており、リアルタイムで映像を見ていただけに「マジか」と声を上げたという。記者はリアルタイムではレースを見ていなかったが、会社の同僚から「徳山の6レース見た？」とすぐにメールが来た。

現在はSNSなどによって、映像などはすぐに広まる。徳山のレース映像も瞬く間に拡散されていた。ただ、ボートレースの舟券は、一度確定してしまえば、結果が変わらない。あきらめたファンも多かったのではないか。その後の対応で、ネット投票で購入した

ファンには賠償金などの名目で払い戻しが行われたが、リアル舟券で買ったファンをすべて救済できるかと言えば、対応は難しいと言わざるをえない。これまでの舟券の常識によって、外れ舟券はすぐに捨ててしまふからだ。

競馬、競輪、オートレースなら、こうはならない。なぜなら審議制度があるからだ。レース中に審議ランプが点灯すれば「投票券は捨てずに大切に持ちください」とアナウンスされる。審議によって、反則が確認されれば着準が入れ替わるなどして確定する。ファンもそれを知っているから、簡単に馬券や車券を捨てたりはしない。

ボートレースは素早い確定を売りにしてきたが、もはやそんな時代ではない。前日や、朝イチにまとめて舟券を買って、仕事終わりにまとめて見る（レース映像を見ないで結果だけ見るファンも多い）人も多い。競馬や競輪でも審議の時間が長いから審議をやめろ、などという声は聞いたことがない。多少、時間がかかっても大

切なお金が返ってくるほうがいいに決まっている。

不良航法や待機行動違反でも着順の入れ替えを

審議制度を導入する前提で、ぜひともやってもらいたい改革がある。それは、「反則をすれば降着（もしくは失格）」という原則を作ることだ。審議制度は徳山のような誤審をなくし、パトロールフィルムなどで、ファンに丁寧に説明することが一番の目的だが、審議する時間が生まれたことによって、より正確に判定が下せるようになる。記者も舟券を買うが、「不良航法」であれば、着順は変わらず確定するのに、「妨害失格」なら加害艇は帰投し、着順が変わる。どちらも反則には違いないのに審判の判断によって舟券の結果が変わってしまう。このことに疑問を持っていた。

また、準優で待機行動違反を犯した場合、賞典除外となるが、優勝戦なら「処置なし」と記載される。いわゆる「やったもん勝ち」で

ある。しかし「反則をすれば降着」という原則を適用すれば、準優であろうが、優勝戦であろうが、予選であろうが、一般戦であろうが、すべて反則艇は降着（もしくは失格）して舟券は確定する。こちらの方がファンにも分かりやすいのではないだろうか。このルールが適用されれば、選手もより慎重にレースを行うようになるだろう。審判も自らの判断が舟券に直結するだけに、より慎重に判断を下すはず。そしてレース映像などを使い、ファンに判定のいきさつなどを説明する。これが正しい審議制度ではないだろうか。

また、反則になる一歩手前の「注意」という制度もある。これもサッカーのイエローカードのように明確にしてはどうか。「注意」を2回受ければ「反則」。つまりイエローカードを2回受ければレッドカードのように分かりやすいルールにするべきだ。ともかく、早急に審議制度を導入して、より信頼して遊べるボートレースになつてほしい。

艇

言

報知新聞 藤原邦充

藤原邦充(ふじわら。くにみつ)
1974年生まれ 50歳

香川県観音寺市生まれ。近畿大学を卒業。就職浪人の末、98年に報知新聞入社。芸能社会、中央競馬、ボートレース（1年だけ）、一般スポーツ担当を経て05年から2度目のボートレース担当に。競輪担当になつて観音寺競輪取材することが夢だったが、無念の廃止に。